

平成十九年二月一日発行 第十七巻第二号 通巻第一八八号 (毎月一回一日発行)  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐

かい

平成19年2月号

岡井省二創刊



# 喜怒哀楽

高橋将夫

敗荷を見てゐて楽になり  
にけり  
哀しみを通り過ぎれば水澄めり  
華やぎは色なき風の中  
にあり  
母である前に女の秋  
裕

秋めいてきたると思ふ妻の顔  
無心にはなれないといふ案山子かな  
胸中はおだやかなりし秋の山  
鬼虎魚それほど怒つてはをらず  
未来へと続いてゐたる月の道

十五周年記念大会2句

大日も熊野に寄りし神の旅  
鮫鱈とねんごろにして十五年

# 素つ首

瀬川公馨

団栗の大往生の興福寺  
物種を拾ふてゐたり小鳥くる  
実南天若冲翁の艶治なり  
横丁は軍鶏の羽にて京の秋  
黒米のジャコメツティを容赦せず  
渋柿の大上段に構えたる  
地下たびの後ろあつあつ滑子汁  
狸毘素つ首とられぬやうにせな  
冬帽の山鳩色を幽閉す  
猪狩の大和の風ふうを好みたる

## 特別作品

鱒や孔子もすなる日向ぼこ  
九つの頭をもて蛇の凍つるなり  
火柱にはらはらしたる落葉焚  
寒月や野面に死花の遊びせり  
冷や冷やと鉛吐きたる天燈鬼  
石露咲いて夷<sup>い</sup>秋<sup>てき</sup>を迎え討ちしたり  
クオリアが生命なりけり寒牡丹  
クオリア「感性のもつ質感」  
雨氷かなあまたの針孔の空きぬたり  
ラスプーチン枯のマントを着たりけり  
ラスプーチン「ロシアの怪僧」  
大倭の冬辺を惜しむ無粋かな

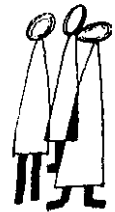
# 槐安集

市場基巳

妻子など打つちやらかして蛙釣  
髭長き田螺が這ふてくる夜長  
われになきこの蟋蟀の一途な眼  
茶の花のしずかに先を争へり  
いや昏し花野に出づる筈の道

水野恒彦

有耶無耶と来て雨の櫓田よ  
うら枯や魂いとどしき句碑ありぬ  
美男かづら熊野の海が見えますか  
歳月の山の重さに蚯蚓鳴く  
弟子いちにんもたず候雁のこゑ



延広禎一

エイリアン海鼠を食つて人間に  
後生樂を唱へつつ牡蠣割るをんな  
ふぐと汁西施が影を背にし  
近松忌あかときの橋擁みたる  
方頭魚神鈴鳴つてをりにける

加藤みき

白砂に並べてゐたる龍の玉  
苔の上に紅葉一片散りてあり  
照紅葉蓬萊山の石の庭  
狐火が靴紐結ぶうちに消ゆ  
白障子老いて直ぐなる背筋かな

石脇みはる

立冬の白曼陀華数つけて  
十一月山焦げてゐるところあり  
子鯨の集まつてをる熊野かな  
日と海と渾然とあり鯔いなとべり  
冬菜畑つづきの湖にいでにけり

竹内悦子

白波の立つ日の岬青鷹  
丸鍋出でたり河童の心かな  
覚えあるメンコする子や十三夜  
散る木の葉奈良坂道のバレリーナ  
土瓶蒸大穴持命かな

中島陽華

山牛蒡もみづれる葉の目出度さよ  
大蚯蚓衿巻をして出でにけり  
湯の神の在す社の草珊瑚  
白万両五右衛門風呂の根際にか  
新月の言葉少なになりけり

栗栖恵通子

暮れぎはの海に耳あり白ふくらふ  
冬蝶のまま空海の肩にゐる  
六道の灰汁など掬ふめくら汁  
葛の湯を溶いて黄道十二宮  
銀紙の音の六花となりけり

大島翠木

生は泣き死は沈黙と山粧ふ  
罰あたりな父を納骨草じらみ  
南無南無とひとりで落つる次郎柿  
湯豆腐はふつつ恋は無重力  
灘音に枯はまゆうの見え渡る

雨村敏子

くさびらの生まれし時の星の数  
牛蒡掘りの海を見てゐる日差かな  
鳥羽離宮に向かひし途中葱畑  
平時とは野山に柿の熟る時  
吾亦紅に日当つてゐるしづけさよ

黒田咲子

やうやくに郁子に届く手見えてをり  
葉の落ちていよよ真白き雀瓜  
小春日や断りきれず本堂へ  
猿柿のおほかた艶の川へ落つ  
一望のしぐれ芒となり孫柿 三豆柿にけり

小形さとる

鉈豆の数をかぞへて去ににけり  
小春風足で用など足してをる  
からす瓜また戦前になつてゐる  
百万遍忽と野焼のけむり立つ  
赤目河豚何にもならん何にもならん



本多俊子

空海の柚子でこぼこでありにけり  
菊の酒まぶたとじれば熊野の碑  
冬蝶のとまる石みな円くなる  
梟やオルガンの音にしたりたり  
ビロードまとふ夜となり星冴ゆる

天野きく江

朴落葉無重力なり思春期は  
小春日や孔雀一羽の大舞台  
古代皿てふ鈍き色冬銀河  
木枯の渡る日杉の匂ひけり  
ちちははを容れては溶かす冬干潟



# 槐市集

奥村邦子

はるばると風の来てゐる芭蕉の实  
菊冷えや骨董市のマリア像  
夕日乗せ枯蟪螂の動かざり  
眠る山しづかに杯を交しをり  
逆光も 順光も 神 枯 野 原

片岡静子

花嫁の父のひざかけ車椅子  
本殿へ迎ふ白無垢冬紅葉  
回廊の冷えびえしたる列のあり  
神殿に木枯入りし挙式かな  
満開の山茶花バりに飛び立てり

加藤富美子

秋ゆくや天につながるいのちの緒  
風鐸の四隅のひびき冬の入り  
鳥影のちらり枯山まのあたり  
達観はまだ道の先散る紅葉  
みどり児の拳のゆるみ山眠る

金澤明子

絹封筒二重に閉じる冬海霧  
地下街のあたりなりけり冬陽炎  
四方ビル真中に冬日万華鏡  
人声を見下ろしてをる聖樹かな  
七五三鼻緒ゆるめる日和かな



# 槐集

## 高橋将夫選

フラクタル曲線乱す冬怒涛 岡崎

岩月優美子

近藤きくえ

鳩浮くを待つアナログの我なりし  
山眠る大いなる魂抱きつつ  
生きてゐる証の蒲団干しにけり

真夜中の寒雷耳は二つあり

冬帝の座したる石に亀裂かな

眠くなる魔法よ冬の日の匂ひ

備長炭にあり若き骨の音

くつさめや一寸法師とび出せり

けだものの舌めらめらと夜の枯野

玄黄のあはひに烏瓜の赤

どびろくをちよつぱりとやりどきどきす

雪女黒装束で来たりけり

碑に白ふくろふの舞ひ降りて

空即是色齒朶の胞子の着地かな

安城

近藤 公子

谷村 幸子

近藤 喜子

中野 京子

しろがねの芒と吾としばし無に  
星の夜の枯れし蓮田の靈気かな  
心字池落葉しぐれとなりぬたり  
吹き降りの空也念佛踊かな  
冬鳥の卍となりし日の出かな

歓声の日矢さす句碑や石露の花 枚方

冬麗の潮目真白き曼陀羅華

一枝に集まる魂の返り花

冬の蚊の耳朶をかすめる思ひかな

日溜りに猫の一匹吊柿

黒竹にぬくみありけり空也の忌

抱かれし嬰の福耳冬ぬくし

寂声さびの案内なりけり紅葉寺

櫟林に日のさしてをる神迎

嗚呼とのみ実相院の紅葉かな

東京

# 銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

生きてゐる証の蒲団干しにけり 岩月優美子  
干したての蒲団にくるまると実に気持がよい。干してくれた妻をありがたいと思う。生きていてよかつたと思う。それほともかくとして、この蒲団は生きている証だと思ひながら作者は蒲団を干しているのである。食欲と言われれば生きている証拠とすんなり思うが、なるほど、蒲団を干すことも、干される蒲団も生きている証には相違ない。

大病でなくちよつとした病気で、結構しんどい思いをする。そんな時、つくづく健康はありがたいと思う。生きている喜びを実感する。人はどこから来て、どこへ行くのか。生死を哲学することもさることながら、日常のほんの些細なことにも生を実感できることはあるのだ。

備 長炭 にあり 若き 骨の音 近藤 喜子

備長炭を叩いた音は誰でも知っているだろう。並べて叩けば、木琴というより鉄琴を思わせる澄んだ音がする。ところが、作者はそこに若い人の骨の音を聞いている。まことにユニーク。年をとると骨がもろくなる。うかつに転べない。骨粗鬆症も心配になる。作者はまだそんな年ではないだろうが、若さへの憧憬がひしひしと伝わってくるようだ。

雪 女 黒 装 束 で 来 たり けり 近藤 公子  
白のイメージの雪女に黒装束で狙いは比較的単純。しかし、そ

れだけで済ませられない何かがある。雪女に黒装束が不思議に似合う気がするからかもしれない。そう考えてみると、雪女は白でも黒でも似合いそうで、冷酷でやさしそうで、処女性があつて母性を感じられるなど、なんでもありそうな気がしてくる。まこと、雪女ほどさまざまに変身できる女性はいないのでないだろうか。

しろがねの芒と吾としばし無に 近藤きくえ  
茫茫たる芒の中にいて、周囲も自分も無くなってしまひそうな錯覚に陥つたという。日ごろ都会の喧騒の中にとくとく、なおさらその感じがわかる。

冬の蚊の耳朶をかすめる思ひかな 中野 京子  
蚊に耳もとにまとわりつかれたらうつとうしい。冬の蚊だと、どこにそんな元気が残っているのかと一層腹立たしくなる。蚊にまとわりつかれているわけではないが、そんな思いをしている作者の顔が想像されて思わず口元がほころぶ。

黒竹にぬくみありけり空也の忌 谷村 幸子  
黒竹にぬくみを感じた作者の感性に共感を覚える。次に、黒竹のぬくみを貴賤を問わずに口称念仏の布教に専念した空也上人の人柄に託した点に共鳴する。黒竹のぬくみがしみみと伝わってくる。

アヴェマリア 落葉降る日に嬰生る 竹中 一花  
めでたい。落葉降る日で淋しい気もするが、アヴェマリアの祝福がどこからか聞こえてくるようだ。